

823  
M8 N2

岷江入楚

李愿

55



雲隠

一河云雲のれや名付の事

此奏をひりりあゝゝ名をひりりあゝゝ

あゝゝ名をひりりあゝゝ名をひりりあゝゝ

百葉集よ人志逝玄より紙巻を隠しりり

弓削皇子薨時置始東人哥

大君を神あゝゝ名をひりりあゝゝ

百三 大休皇子被死時作哥

大休皇子被死時作哥

大休皇子被死時作哥

百三 神龜六年大長長尾王賜死の時作哥



大君のみやうにあらはれりて  
シラキノアニ 天平七年新羅尼理死去時大伴即女悲嘆  
 作奇

とて久々ぬぬめりてはまはるに  
 家よりわきまをきくはれりて

いふやうにあらはれりてはまはるに  
 めうめいひひきやうにあらはれりて  
 おとろれりてはまはるに

一 名うらりてはまはるに

天台所立ハは散 之義通 門 門宣門也  
 有門乃得道ハ是曇論云門明道ハ成寧論云  
 此有此門ハ也梅延經説亦云此門ハ昆動論

義云源氏不知此例不當  
 不可謂之此例不當

明きりやうにあらはれりてはまはるに  
 去る所来せはれりてはまはるに  
 ていふにあらはれりてはまはるに  
 不之儀是なり今れ云うれりてはまはるに  
 中へいりてはまはるに  
 餘とてはまはるに  
 いふにあらはれりてはまはるに  
 名賢乃中にあらはれりてはまはるに  
 下とてあらはれりてはまはるに  
 乃てあらはれりてはまはるに  
 川乃河との窓てはまはるに  
 乃てあらはれりてはまはるに  
 一 六条院に在る之也







有後ハ孝子相戒テ以

書也

白死孝子紫白也

花杵八時和歲豐ニメ  
宜黍稷也ヨク其義

而無其刻

由庚八方物由之道也

宗無八萬物以極其

高人也

由儀ハ万物之生長也

書

事ハ物ニヨリテ面ニハカク作ル所ニ至ル  
 卷中ノ小儀縁ハ二ニテ陰長ニテ其後嗣  
 御志ニヨリテ此等ノ小詞ありハカク作ル所ニ至ル  
 作此等ノ名ニヨリテ其等ノ小詞と見ル事天竺レ  
 教ノ法ニ例ヨリテ其等ノ小詞と見ル事天竺レ  
 俗書ニヨリテ毛詩ノ小雅中ニ南陔白花々  
 繇由庚崇由儀之六篇ハ名ノモテ其等ノ小詞と見ル  
 是ハ逸詩ト云テ其等ノ小詞と見ル事天竺レ  
 あれハヨリテ東廣徴ト云テ其等ノ小詞と見ル事天竺レ  
 亡ノ詩ト名付テ文選中ニ其等ノ小詞と見ル事天竺レ  
 笙詩ト云テ樂曲ノ名付テ其等ノ小詞と見ル事天竺レ  
 其等ノ小詞ト云テ其等ノ小詞と見ル事天竺レ  
 其等ノ小詞ト云テ其等ノ小詞と見ル事天竺レ

一、雲之隱ハミと英名各其別儀依據あり

河小卷名自告云云よひうかたれ給ひあけ  
いふ其心死

雲隱上人書逝乞乞公事人百葉人地也

そ、然るに、  
あまのこゝろ

家より出く雲がれり哉

面  
 伝  
 此  
 名  
 祿  
 乃  
 池  
 う  
 なる  
 鴨  
 と

ふりてはるる雲うれあ

此外不て勝計されハば奉云隠と云名ハ源氏麁  
向ししより此にとりて所く子名也隠名  
云隠同より源氏より何より以て幻と云ふもの











久矣孫氣仍雲隱卷之中以讓之也

一細云柞才廿六よ雲隠をよりいさの老人に難儀と  
せり然もそふ家河原にうきうきあかしたる  
雲隠しより人々遊去ぬる所をち集りひま  
まり禁忌の刻なり——此作を或部奇よ  
判こられぬ——書はれ月夜といふて阿あは  
急傷いぢうふれ凡は物語ハ河海よりいす  
くくえれ流みそてより作り物よりいす新取  
宣道く桐葉帝と延長りいさの等其勢之假帝く  
此雲隠の中道へ秋高む時乃教は物語其本にか  
らけり中は依皆示るゝ亦宜之をく好文其道を  
終りハ仙道へ歸する様とく畢竟此雲隠ハ衣  
ろよりいさ不書之説寂て然其所ハ物語一部之

中氣情とけふふ海くして事あるなり此所に  
源氏物語の事とあるふは云ひ不て及又同  
く海なるありて仍て略之作るは趣向玄に  
玄なるふとく幻巻とて白文也とのあり九年  
なりて一ひ巻なりなり九年断して年記  
をうつ也幻巻とていふ歳人十年十何年と  
え帳の事あり云ふなり十年十何年と  
雲々これの中にいつてて総して巻なり本巻  
またて此記難礼なりふは此なり花鳥十何歳  
了十九年とてと載ありとあるまともは此  
巻とて此事なりとあり



此九ヶ年此事可在雲隱卷之中其故幻卷  
廿五此卷ハ廿七ノ中ヨリ云々云隠ト云々  
此歌号ト云々、實小之其巻ト云書是別  
巻ニ此抄本ノ

レハ是又古旧タリ 若又意化換骨シテ若ニ形骸不  
留ト云トモ頗可似虚誕依之同文所不及一言之知  
却而盡善盡美ナル

惣別此物語哀傷及數人相戀更衣夕息上夢と柏  
木云衆所見而此紫と大君等々 相帝所雲云なり私入  
是等小皆其等如き一たされ半りて不可得  
合も去びとて一處乃ふ事と耀ふへき事哉部  
うはれうらふりやうう一筆不及して  
又と闕とやうふの是一切の事不言の如くわ  
知ありとらふりて余と汝へ維摩之一點を云  
あやま是也

河苑乃鏡  
美苑乃鏡  
寫之  
一五畧之







